

## 教育長報告事項資料

### 教育委員関係報告

- 1 教育長職務代理者の指名（教育長）

### 一般事務報告

- 1 しろいし蔵王高原マラソン（9/17）（生涯学習課長）
- 2 まちづくり協議会会長・公民館館長・公民館事務長合同会議（9/26）  
（生涯学習課長）
- 3 教育委員辞令交付式（10/2）（学校管理課長）
- 4 9月議会の教育委員会関係一般質問（会期9/1～22、一般質問9/4,5）  
（学校管理課長）
  - （1）高子秀明議員（学校再編）
  - （2）大内卓也議員（廃校利用）
  - （3）佐藤龍彦議員（教員の労働環境）
  - （4）佐久間儀郎議員（学校の不審者侵入防止対策）
  - （5）村上由紀議員（学力向上、学校再編）
  - （6）佐久間順子議員（発達障害児の就学支援）
  - （7）四竈英夫議員（市民プール新設、学校統合）

### 専決事務報告

なし

### その他

- 1 全国学力学習状況調査結果の分析概要（HP掲載）（教育専門監）
- 2 その他

## 令和5年度 全国学力・学習状況調査結果概要

白石市教育委員会

### I 調査の概要

#### 1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
  - (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
  - (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (※文部科学省調査目的)

2 調査実施日 令和5年4月18日(火)

3 調査対象

小学校6年生	9校	208人
中学校3年生	5校	223人

#### 4 調査内容

(1) 教科に関する調査【国語，算数・数学，英語（中学校のみ）】

- ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

(2) 児童生徒質問紙調査

○児童生徒を対象とした、学習意欲，学習方法，学習環境，生活の諸側面等に関する調査

#### 5 その他

本調査結果は、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面です。

### II-1 調査結果（令和5年度）

#### 1 小学校第6学年

◇白石市と宮城県・全国との平均正答率

※ 宮城県…仙台市を除く

教科	白石市・平均正答率%	宮城県・平均正答率% (本市と県との比較)	全国・平均正答率% (本市と全国との比較)
国語	67	65 (+2)	67.2 (-0.2)
算数	60	58 (+2)	62.5 (-2.5)

#### 2 中学校第3学年

◇白石市と宮城県・全国との平均正答率

※ 宮城県…仙台市を除く

教科	白石市・平均正答率%	宮城県・平均正答率% (本市と県との比較)	全国・平均正答率% (本市と全国との比較)
国語	68	68 (±0)	69.8 (-1.8)
数学	46	44 (+2)	51.0 (-5.0)
英語	40	39 (+1)	45.6 (-5.6)

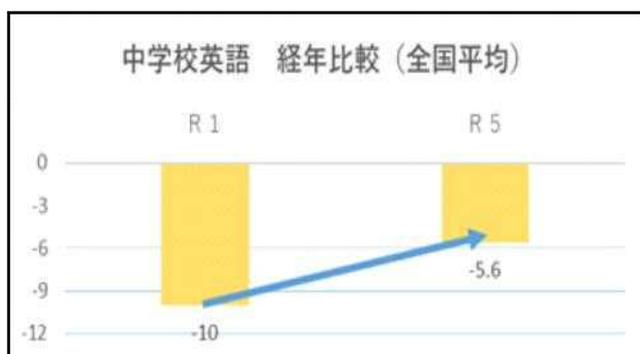
## Ⅱ－２ 調査結果（経年比較）

□白石市平均値と全国平均値の比較

⇒出題形式の変更により令和元年度からの経年比較

⇒令和２年度の平均値比較は全国学力・学習状況調査が未実施のため表示なし

⇒英語は前回実施が平成３１年度（令和元年度）のため、別グラフで表示



### 【結果の概要】

- 今年度の全国学力・学習状況調査の結果については、小学校の算数、及び中学校の国語、数学、英語ともに、全国平均には及ばなかったものの、年々差を縮めている状況です。また、小学校国語においては全国平均とほぼ同等の結果となりました。
- 県の平均と本市平均の比較においては、小中合わせて5教科のうち4教科で上回る結果となり、総じて学力の改善は良好に進んでいると考えます。
- 経年比較においては、小中学校の全ての教科において改善傾向が見られました。また、継続的に改善が進んでいることが認められます。
- 小学校では、全国平均を上回る学校が複数校ありました。中学校においても、国語・数学において全国平均を上回る学校がありました。このことから、市全体の学力は改善傾向にあると捉えています。
- 以上のことから、全体的に学力は改善傾向に進んでいると考えます。一方、全国平均との差を踏まえると、中学校数学については課題がある結果と言えます。

### Ⅲ 各教科及び質問紙の結果と考察

#### 小学校国語

「思考力・判断力・表現力等」の「読むこと」では、文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめる設問（記述式）において全国平均を上回りました。各学校において、国語科を中心に各教科等において読み取った内容について字数やキーワードを指定した条件付きの作文等に取り組むなど、自分の考えをまとめて書く活動の成果と考えます。また、「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、漢字を文の中で正しく使う設問において、全国平均を上回る結果であったことから、既習の漢字を適切に使う力が身に付いていると言えます。

一方、「知識及び技能」の「情報をどのようにして整理しているかについて説明したものとして適切に選択する」設問では課題が見られました。また、「思考力・判断力・表現力等」の「書くこと」の「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」設問では、全国平均を上回ったものの、正答率は約 $71\%$ と低い結果でした。

複雑化する現代社会においては、単一の情報だけでなく複数の情報を目的に応じて組み合わせる最適解を見いだすなど、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使える力が求められています。そうした力を身に付けさせるためには、授業の中で複数の情報を比較したり、関連付けたりして検討するように促す指導が必要です。今後各学校では、国語科において、数社の新聞記事を読み比べるなど、複数の情報を扱う学習を工夫するとともに、他教科等においても、教師が意図的に複数の資料を提示し、文章や図表等を比較して共通点や相違点を見いだしたり、目的に応じて必要な情報を見付け思考をまとめたりするなどの学習に取り組んでいきます。

#### 中学校国語

「思考力・判断力・表現力等」の「話すこと・聞くこと」「読むこと」について、「聞き取ったことを基に目的に沿って自分の考えをまとめることができる」「読んだ文章を参考にして知識や経験に触れながら書く」設問（記述式）については全国平均を上回りました。設問の指示に従い適切に書くことができた要因として、昨年度の課題を踏まえ、読み取った内容を基に自分の考えをまとめる活動において、条件付き（根拠・理由・引用・字数・段落構成等）の作文等を取り入れた学習指導の改善が、生徒の書き表す力の伸びにつながったと考えます。「知識及び技能」の「我が国の言語文化に関する事項」の「いひける」を現代仮名遣いに直す設問や、古典の原文と現代語の文章とを対応させて内容を捉える設問は、全国と同等ないし上回る結果となりました。これは、本市生徒が授業で学習した文語のきまりや訓読の仕方を理解し、さらに、AIドリル等を活用した学びの確認や関連する問題に取り組んだことにより知識の定着が図られたことが要因の一つと考えます。

一方、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の文脈に即して漢字を正しく書くことができるかをみる設問（おし量る）では、平均正答率が $59\%$ を下回り、無解答も約 $50\%$ の結果でした。誤答の多くは“押”であり“押し量る”という言葉になじみがないなど、文脈に即して「おし」の意味を捉えることができず、同じ訓を持つ“押”と書いたと推察されます。言葉の意味を捉え漢字を正しく用いる態度と習慣を、書く活動に加え、端末等を活用して文字を入力する際にも、漢字が持つ意味を踏まえ適切に選択することに留意した学習を進めていきます。

併せて、全体的な傾向として現行の学習指導要領に新設された「情報の扱い方に関する事項」の設問は全国平均を下回りました。情報の扱いは、問題を整理し解決するための重要な資質・能力の一つとされています。国語科においては、「原因と結果」「意見と根拠」「具体と抽象」といった関係に注意し、情報と情報がどのように結び付いているかを捉えた上で、「話す・聞く・書く・読む」の場面で適切に活用できるよう指導を工夫していきます。

「図形」領域の「幅の等しいテープを直線で切って作った図形について考察する」設問（図1）では、「台形」の意味や性質について理解していることが分かる結果でした。本市の児童は、示された図形から「向かい合った一組の辺が平行である」という性質を見だし、それを基に図形を弁別できており、この設問の正答率が全国平均を上回りました。今後も、図形の観察や操作活動などを通して、図形の意味や性質について考え理解する学習を大切にしていきます。

一方、問題形式が「記述式」の設問については、全国平均との乖離が縮まり改善傾向が見られるものの、依然として課題が見られました。「数と計算」領域の「所定の本棚に〇人分の辞典やファイルを並べることができると判断する」設問（図2）では、数量の関係を捉えて求め方と答えを式や言葉を用いて表現することが問われました。本市の約〇〇%の児童は正しい考え方から正答を導き出そうとしておりましたが、正答にたどり着いたのは約〇〇%でした。解答状況をみると、「正答の条件を満たした記述でありながら答えが間違っている」「式や言葉の条件が不足した記述になっている」といった誤答が目立ちました。

また、今年度の調査で最も正答率が低かったのは、「図形」領域の「幅の等しいテープを直線で切って作った底辺が等しく形の異なる2つの三角形の面積の大小を判断し、その理由を説明する」設問（図3）でした。2つの三角形の高さが等しいことに気付けば解ける問題でしたが、本市の正答率は全国平均を上回ったものの約〇〇%でした。誤答をみると、高さが具体的に示されていないことを理由に面積を比べることができないと判断している児童や、辺の長さを比較して鈍角三角形の面積の方が大きいと判断している児童が目立ちました。この結果から、「三角形の高さ」と「平行線の性質」についての理解が不十分だと言えます。高さが具体的に示されていない図形であっても平行線の性質から高さが等しいことを見いだしたり、適当な数値を当てはめて計算したりして考えられる力を育む学習活動の充実が必要と考えます。

算数科の学習においては、問題を見だし、言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて、筋道を立てて説明したり論理的に考え、自ら納得したり他者を説得したりする力が求められています。今後は、主体的な問題設定やその解決方法・判断の理由、見付けた事実を数学的な表現を用いて説明し合うこと、また、解決の過程や結果を振り返り、学びを再確認したり発展的に考えたりする活動を踏まえた学習を進めていきます。その際、AIドリルをはじめとするICTを活用したこれまでの授業実践を一層充実させ、児童一人一人の資質・能力の育成・向上に取り組んでいきます。

(1) ゆいさんは、下のようにテープを直線で切って、①、②、③、④のような四角形をつくりました。

①、②、③、④について、どのような四角形なのかを、次のようにまとめます。

①、②、③、④はどれも ① ② です。  
なぜなら、③ ④ だからです。

図1 幅の等しいテープを直線で切って作った図形について考察する設問

(2) けんたさんの学級では、1人が3種類のファイルを1冊ずつ使うことになりました。それぞれのファイルの厚さは、1.4 cm、1.6 cm、2 cmです。けんたさんの学級の人数は23人です。

下のような、はば120 cmのたんに、ファイル多全部並べて入れることができるかどうかを考えています。

けんた  
あやね

図2 所定の本棚に23人分の辞典等を並べることができるか判断する設問

(4) えいたさんたちは、テープを直線で切って、下のような①と②の2つの三角形をつくりました。

上の①と②の三角形の面積について、どのようなことがわかりますか。下の1から4までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。また、その番号を選んだわけを、言葉や数を使って書きましょう。

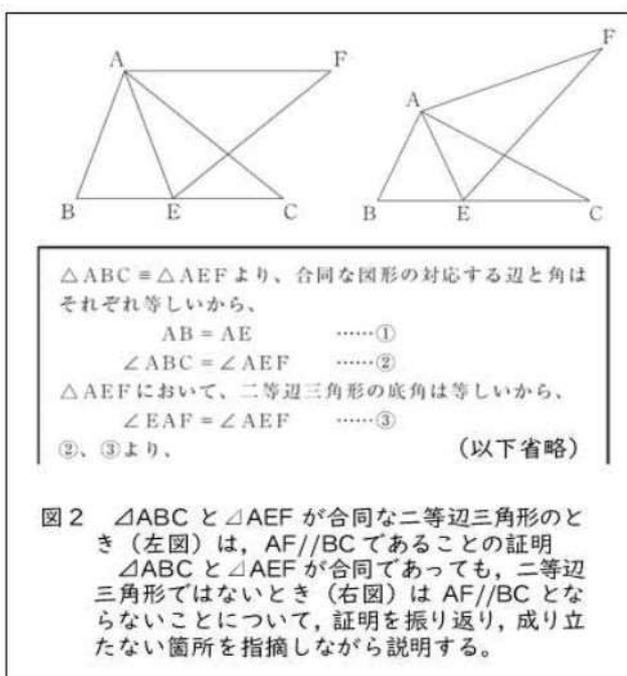
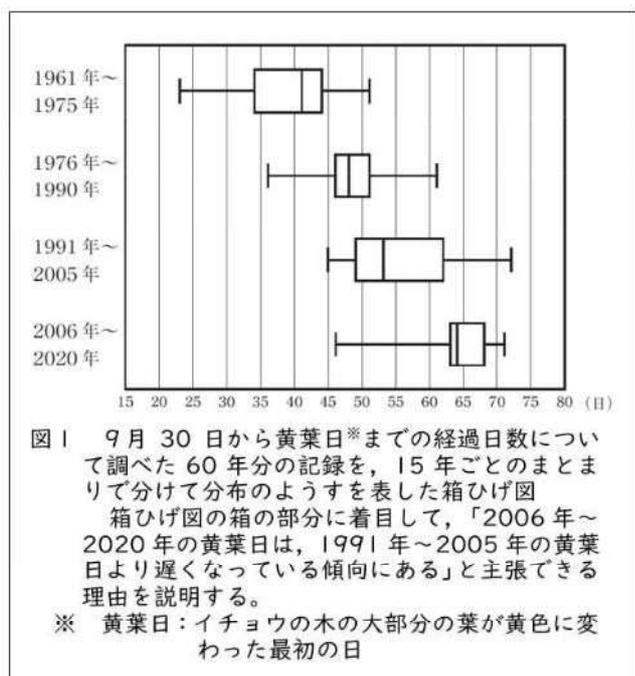
- ①の面積のほうが大きい。
- ②の面積のほうが大きい。
- ①と②の面積は等しい。
- ①と②の面積は、このままでは比べることができない。

図3 2つの三角形の面積の大小を判断し、その理由を説明する設問

「関数」領域 一次関数 設問及、「数式」領域 文字式 計算 設問、「データの活用」領域 用語 意味 問う設問；正答率が全国平均と同程度結果；基礎的・基本的知識及技能 い「改善が見した。知識及技能 習得 いした授業 おい；A I ド、活用した指導 個別化 重視した学習指導 改善が一要因 考えす。

一方で、「数と式」領域の「自然数の意味を理解している」設問や、「図形」領域の「空間における平面が同一直線上にない3点で決定されることを理解している」設問では、正答率が全国平均を下回りました。小学校で学習した内容について、振り返って捉え直したり、より抽象化して考えたりする学習に課題があると考えられます。授業においては、数の範囲を明確にしながら問題解決に取り組む中で、シミュレーションソフトや模型等を用いて観察や操作、実験等を行い、実感を伴いながら直線や平面の位置関係について理解を深めることができるよう授業改善を進めていきます。

記述式の設問においては、「図形」領域の「ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明する」設問の正答率は全国平均と同程度となりました。一方で、「データの活用」領域の「複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する」設問（図1）や、「図形」領域の「結論が成り立つための前提を、問題解決の過程や結果を振り返って考え、成り立つ事柄を見だし、説明する」設問（図2）では課題が見られました。



授業において、データの分布の傾向を比較し判断の理由を数学的な表現を用いて的確に説明できるようにすることや、証明や問題解決を終えた後でも、条件を変えた場合などの新たな問題について、証明に用いた前提や根拠を整理して考え、図形の性質を論理的に考察し表現することができる活動の充実を進めていきます。

課題を改善するには、学習過程の果たす役割が極めて重要と考えます。数学科においては、生徒が目的意識をもって数学的に問題発見・解決する過程を遂行することに配慮した学習を実践していくことが大切になります。今後は、生徒自らが問題を見だし、その解決に向けて、構想・見通しを立て、他者と協働的に問題に取り組んだり、問題解決の過程や結果を振り返って考察したりする学習活動を重視した主体的・対話的で深い学びを一層進めていきます。併せて、1人1台端末で利用できるA Iドリルやデジタルコンテンツ、協働学習支援ソフト等の一層の効果的な活用を視点とした授業改善を進めていきます。



学習指導要領における「聞くこと」領域では、出題の趣旨である「情報を正確に聞き取る」設問に関して理解が定着している結果となりました。部屋の中の様子を描写する英語を聞いて適切な絵を選択する設問に対し全国平均を上回り、道案内の場面で目的地までの道順を説明する設問は全国平均と同等の結果でした。一方で、「日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して必要な情報を聞き取る」設問には課題が見られました。その要因として、自分の置かれた状況の把握不足により、必要であった班の仕事内容を聞き取るに至らなかったことが考えられます。「聞くこと」の言語活動の成果は見られますので、今後は、その成果を生かしながら、全てを聞き取ろうとするのではなく、自分の置かれた状況を確認し、関連する語句や表現に着目して必要な情報を聞き取る活動の場面設定を工夫するなどの改善を図っていきます。

「読むこと」領域の「文と文との関係を正確に読み取る」設問は、英文を読み、文中の空所に入る適切な語句を選択するものです。結果は全国平均と同等であり、おおむね良好な状況と言えます。一方「日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を読み取る」設問では、相手が示した2つの条件のうち、後半に書かれている条件を読み取ることができなかつたと見られる誤答が多く、正答率が30%を下回る結果となりました。今後は、広告や予定表、手紙、電子メール、短い文章などから、自分が必要とする情報を読み取る活動や、複数のパンフレットを見て自分が必要とすることが書いてあるものを探す活動等、必要な情報と不要な情報を整理しながら読む活動を取り入れた学習指導の改善を図っていきます。

「書くこと」の設問については、全体として課題が認められます。その中でも「①未来表現(be going to)の肯定文を正確に書く」設問、「②疑問詞を用いた一般動詞の2人称単数過去形の疑問文を正確に書く」設問は、全国平均正答率を10ポイント以上下回りました(設問を下に掲載)。

【10ポイント以上正答率が低かった問題】 設問9(1)の①② 学習指導要領における領域「書くこと」

①、②について、必要があれば( )内の語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして、それぞれ会話が成り立つように英文を完成させなさい。

① <先生と生徒の会話>

A : Do you have any plans for summer vacation?  
 B : Yes. I (            visit            ) my uncle in London.  
           I can't wait!  
 A : Wow, that's nice!

② <友達同士の会話>

A : Oh, you have a new watch!  
 B : Yes, I got it yesterday.  
 A : (            buy            ) the watch?  
 B : At a department store near the station.

①の設問では、未来表現以外の肯定文を書いた誤答 (can visitやvisited) が多く、時制を正しく判断して文を書くことに課題が見られました。②の設問では、疑問文を書いていない誤答が多いことから疑問文の理解が不十分であると思われます。課題となった理由の一つとして、自分の考えを英語で伝え合う場面(話してみる・書いてみる)の言語活動の不足が考えられます。短いやり取りを含め、自分の考えを英語で伝え合う場を授業の中で計画的・継続的に設定することが大切です。生徒自身が教師やALTに質問する場面や生徒同士で質問し合う活動を行ったり、

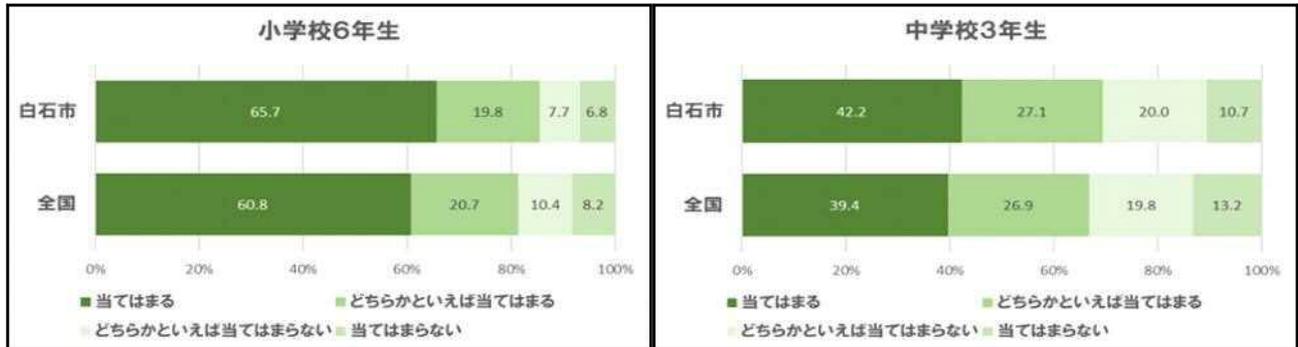


自分が質問したことを書き出して正しく表すことができているか確認したりする言語活動を実施するなど、授業を通して改善を図り、実践的コミュニケーション力を高めていきます。また、AIドリルを使い、基礎的な知識をインプットする問題と習得した知識をアウトプットする問題を関連させて取り組むなど、授業における効果的な活用を通して、基礎的な英語力の育成を進めていきます。

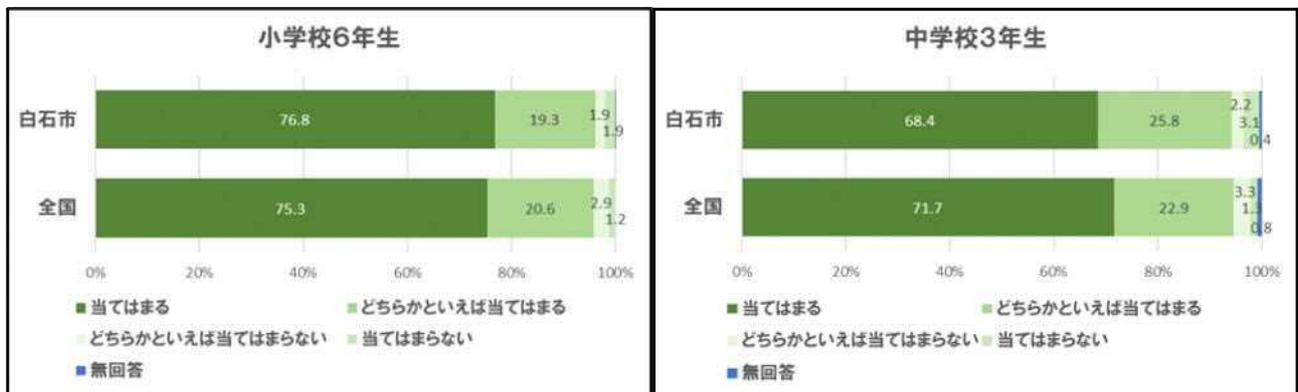
## 児童生徒質問紙調査結果概要

本市で重点としています「非認知能力（自己有用感等）」「シビックプライドの醸成」「ICT活用」の項目を抽出して取り上げております。

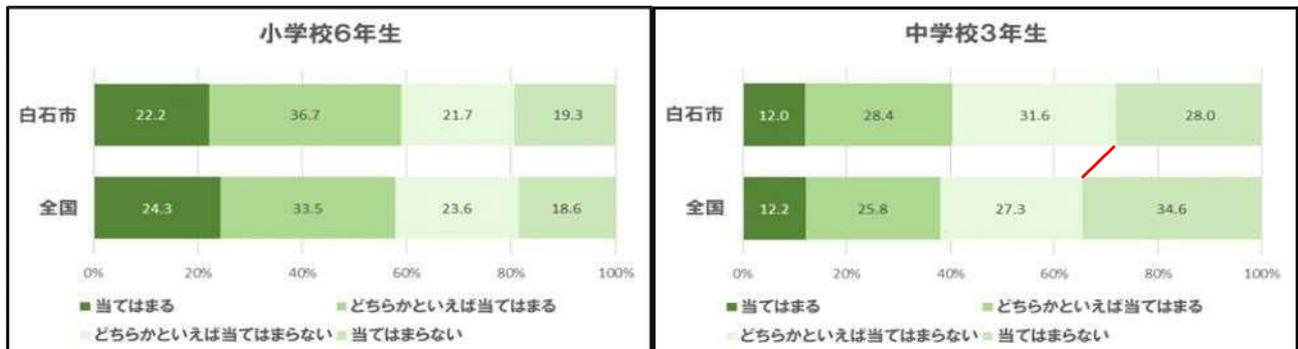
### ■将来の夢や希望を持っていますか



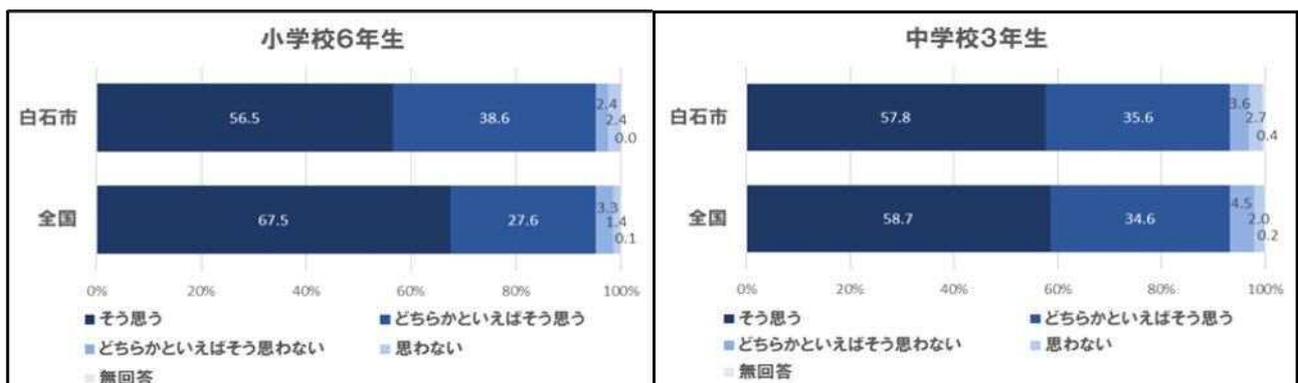
### ■人の役に立つ人間になりたいと思いますか



### ■今住んでいる地域の行事に参加していますか



### ■学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強に役立つと思いますか



質問紙調査では、児童生徒の学習意欲や規範意識・自己有用感、生活・学習習慣などに関する学習状況調査も実施されています。前ページのグラフは、本市で重点としている「非認知能力（自己有用感等）」「シビックプライドの醸成」「ICT活用」と関係する項目を抽出して示しています。「非認知能力（自己有用感）」等に関わる意識調査の結果として、「将来の夢や希望を持っている」の質問に対する肯定的な回答は全国平均を上回っています。また「人の役に立つ人間になりたいと思っている」の質問に対する肯定的な回答は約90%であり、昨年度と比べると、小学校においてその割合は増加しております。このことから本市の児童生徒の、自己有用感や学びに向かう力、人間性等の良好な状態は、これまでの教育活動の成果であると考えます。

また「今住んでいる行事に参加している」の質問に対して、小中学校ともに肯定的な回答は全国平均をやや上回る状態でした。さらに、中学校の「当てはまらない」の回答は全国平均と比較し約7%低く、この結果は、地域への無関心さではなく、地域に対する思いや意識の高さの表れと考えます。これまでの志教育等、人との関わりや地域への貢献を視点とした各学校での様々な取組が要因の一つであると考えます。



課題の一つとして「ICTの活用」が挙げられます。前ページの「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強に役立つと思う」の質問に対する肯定的な回答は約90%であり、児童生徒は効果的と捉えています。教員もその効果は認識しており、学校対象質問紙の「配備されたPC・タブレットなどのICT機器を使用している」の質問に対し、「ほぼ毎日」「週3日以上」の回答を合わせると約90%となっています。しかし、授業における「児童生徒同士がやりとりする場面」「自分の考えをまとめ、発表・表現する場面」の活用についての質問では、「ほぼ毎日」「週3日以上」を合わせた回答は小学校は80%程度、中学校は90%程度にとどまっている現状にあり、使う場面や方法等の改善・充実が今後の課題と考えます。

### 【「人の役に立つ人間になりたいと思うか」の質問回答結果と学力調査結果の関係】

[小学校6年生]

選択肢	児童数	児童数の割合 (%)	平均正答率 (%)	
			国語 (14問)	算数 (16問)
1 当てはまる	158	77.8	68.0	61.9
2 どちらかといえば、当てはまる	37	18.2	62.7	53.5
3 どちらかといえば、当てはまらない	4	2.0	46.4	46.9
4 当てはまらない	4	2.0	46.4	46.9
合計	203	100.0	市平均 67	市平均 60

※表の集計値は、教科に関する調査を一つ以上実施し、かつ、質問紙調査を実施した児童を対象としておりますので、前ページグラフの数値とは異なる値となっております。

### 【「今住んでいる地域の行事に参加しているか」の質問回答結果と学力調査結果の関係】

[中学校3年生]

選択肢	生徒数	生徒数の割合 (%)	平均正答率 (%)		
			国語 (15問)	数学 (15問)	英語 (17問)
1 当てはまる	27	12.2	70.1	51.1	46.4
2 どちらかといえば、当てはまる	63	28.4	69.0	48.4	39.6
3 どちらかといえば、当てはまらない	71	32.0	67.7	46.7	40.6
4 当てはまらない	61	27.5	66.0	42.3	38.3
合計	222	100.0	市平均 68	市平均 46	市平均 40

※表の集計値は、教科に関する調査を一つ以上実施し、かつ、質問紙調査を実施した生徒を対象としておりますので、前ページグラフの数値とは異なる値となっております。

上の2つの表は質問項目の回答結果と平均正答率との関係を表したものです。質問内容に対し肯定的な回答であるほど、小中学校ともに全ての教科において学力調査結果の数値が高い傾向にあり、自己有用感や地域に積極的に関わる意識・行動と学力との関係性が読み取れます。このことは、本市が学力向上の重点として掲げ取り組んでいる、非認知能力の育成やシビックプライドの醸成等の重要性が確認できる結果であると捉えています。



## IV 調査結果を踏まえて（今後の取組）

### 学力向上グランドデザインの推進

- (1) 令和元年度より学力向上対策として取り組んできた、年2回の市学力調査と全国学力・学習状況調査結果を踏まえた「分析」「課題への対策」「実施」のR(リサーチ)－PDCAサイクルが定着したこと。また、グランドデザインに示されている学力向上施策の確実かつ主体的な取組が改善につながったと考えます。今後も、この取組を継続していきます。
- (2) 中学校区ごとに算数・数学の課題を踏まえた授業研修を実施し、算数・数学の学習指導の改善を図るなど、小中連携による授業改善を進めます。
- (3) 結果の分析や考察について、白石市学力向上推進委員会や校長会等で共有し、課題改善を確実に進めていきます。また、各学校の実態、課題を共有し、学校と教育委員会で協働的に課題に則した対応、支援を展開していきます。

### 学習指導の充実・授業改善

- (1) 調査結果に基づき、各学校において学習指導の充実・授業改善策を作成し実践に取り組みます。12月に行われる本年度2回目の白石市学力調査で、その改善策等の有効性を検証し、必要に応じて更なる修正・改善を行いながら、学力向上を図っていきます。
- (2) 令和2年度（中学校は令和3年度）より完全実施となった学習指導要領を踏まえた授業を一層展開し、新学習指導要領が求める資質・能力の育成を図っていきます。特に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実による主体的・対話的で深い学びの実現に向け、「これまでの授業からの転換」を視点とした授業改善を進めていきます。
- (3) 「個別最適な学び」の対応として、個の状況に応じた学びの教材であるAIドリルの活用が学力向上につながっています。今後も授業の様々な場面・活動での一層の有効活用を進めていきます。
- (4) ICTの活用が学習指導の改善の視点の一つです。協働的な学びの場面での使用など、授業での多様な学習活動で積極的に実践し、検証を重ねながら効果的な利活用を展開していきます。



### 生活習慣の改善



- (1) 安定した生活習慣と子どもの学力には相関関係があると言われていています。食事、睡眠の時刻や時間についてお家で話題としていただくなど、学校と家庭で連携を図りながらより良い生活習慣の確立に向けて、協働的に進めていきます。
- (2) ゲームやスマートフォン等の使い方、使用時間は学力面や健康面に大きな影響を及ぼしていると考えられます。昨年度より実施している児童生徒自らが、何が問題で、それはなぜか、そのために自分たちはどう行動していくことが大事なのか…という自覚と実践力を高める活動を今後も推進していきます。

### 学校と家庭の連携

- (1) 学力向上を進めていくためには、学校だけではなく家庭学習の充実も欠かせません。家庭における学習計画（時間や場所）を立て、学習内容を選択し、自己を調整しながら家庭での学習に取り組むことが大切です。非認知能力の育成も含め、家庭での学習に対する姿勢、習慣化を図る取組を保護者の皆様の御理解と御協力をもとに展開していきます。